

財^{たから}　　今、何を大切にしていますか？

蔵の財よりも身の財勝れたり、身の財より心の財第一なり。この御文を御覧あらんよ
りは、心の財を積ませ給うべし。
（日蓮聖人御遺文・崇俊天皇御書）

この文は日蓮聖人が檀越の四条金吾に与えられた御書の一部です。生来短気な四条金吾に耐え忍ぶことを教えようとなさって、短気が災いして殺されてしまった崇俊天皇の事を記されました。

蔵の財というのは「物」です。あらゆる物品には価値があります。その代表格としては「お金」がありますね。お金が欲しい。多ければ多い程良い。お金さえ有れば何でも手に入ると考える。健康や教養（身の財）も愛情さえも買うことが出来ると思えてしまいます。だから、お金が少ないと心配になる。老人になると特に不安が強くなる。この弱みにつけこまれた人々が、あの豊田商事の被害者だったのでしょね。

しかし、お金が欲しいと考えたのは、むしろ加害者の永野会長のほうで、そのために命（身の財）を失ってしまった。いわば永野会長自身が「蔵の財」に迷わされた被害者だったのでしょ。悲しいことです。勿論、老人からお金を騙し取ることで、豊田商事の社員は慈悲も、他の人を尊敬する心も捨ててしまいました。即ち、「心の財」を失ってしまったのです。

私達は、身の財も心の財も、それが大切な物であることに気付かずに生きていることが多いようです。そして、その財を失ってみてはじめて、その大切さに気付きます。

「心の財」は究極のところ「仏様の心」です。お経には「一切衆生は、みんな仏性を持っている」と教えられています。誰にも生まれながらに仏様になる性質を持っているということ、ふぎようぼざつ不軽菩薩は自分に危害を加えようとする人に抵抗せず、その人を拝んだそうです。自分を害する人の中にも仏性が有ることを忘れず、不軽菩薩はその仏性を拝んでおられたのです。相手を尊敬する心が、相手の「優しいところ」を呼び起こすのでしょね。

私達はこんなに広い心には成れそうありませんが、少しでも近づけると良いですね。

昭和六十年九月号

三界無安　　憂いの中から

人間に生をうけたる人、上下につけて憂なき人はなけれども、時にあたり人々にしたがいて嘆き品々なり。たとえば病の習いは何の病も重くなりぬれば、是にすぎたる病なしと
思うが如し。

(日蓮聖人御遺文・光日房御書)

法華經の譬諭品第三に「三界は安きこと無し、なお火宅の如し、衆苦充滿して甚だ怖畏すべし、常に生老病死の憂患あり。……」と有ります。老い病み死することの憂いはもちろんですが、人として此の娑婆世界に生まれる事が憂いの始まりですね。この一節はお配りしている「日蓮宗信行要典」の十五ページに有りますので読んでみてください。

日蓮聖人は「人間としてこの世に生をうけた人は、自分の上下にかかわらず憂いの種を持たない人は無いけれども、その時によって人によって嘆きは様々です。例えば、病というものはどんな病気であっても重くなれば、これ以上の病気はないと思えるようなものだ」と説かれます。

苦しい時、悲しい時、自分が世界一不幸な人間に思えて、逃げだしたくなる。逃げてもまた次の憂いがやってきます。

先般の阪神淡路大震災では、五千人を超える死者をだし、多数の家が崩壊し、燃えさかる炎の中に焼失しました。永久に続くかに思えたであろう家庭の平安が一瞬にして壊れ去ったのですから、その苦痛のいかばかりかと、テレビの画面に向かって合掌していました。

あれから二カ月を経過して、避難所で暮らす人は徐々に減ってきましたが、心の傷は癒えず、不眠に悩む人、生きる意欲を失った人が多数居られます。私の勤める病院からも医療救護チームに参加し、今も続けています。自分自身で神戸に行ってお手伝いしたいと思いつつも、若い人々を派遣する立場の私は、疲れ切つて帰る人から想像を絶する神戸の惨状を聞くばかりです。

しかし瓦礫の街の中で新しい人と人のふれあいや支えあいが生まれ、苦難を克服する姿が報道されるのを見ると、人間の持つ力は素晴らしいと感激します。憂いを克服する方法は、譬諭品にあるように衆苦充滿しているのが本来の自分と認めて、その苦難に正面から立ち向かうことなのでしょうね。

人は誰でも仏様の子だから無限の力を持っている。投げ出さないこと！ 信じること！
そんな教訓を神戸の人に頂きました。合掌

平成七年春号

人を軽しめば　　因果応報　　

高山に登る者は必ず下り、我人を軽しめば還って我人に輕易せられん。形状端嚴をそしれば醜陋の報いを得、人の衣服飲食を奪えば必ず餓鬼となる。……是は常の因果の定まれる法なり。

（日蓮聖人御遺文・佐渡御書）

これは、聖人が五十一歳、流罪先の佐渡からお弟子さんたちに出された手紙の一節です。追伸で「紙が無い上に、誰か一人でももれば恨めしいだろうから、寄り合つて読んで下さい」と。そして御自分の厳しい生活を少しも書かれず、弟子や信者さん達の無事を案じておられます。

右記の御遺文は「高い山に登る者は必ず下り、自分が他人を軽く見れば、逆に他人から軽く見られます。他人の顔立ちや心がけを悪く言えば自分が醜く卑しく成ります。他人の衣服や飲食を奪えば餓鬼と成ります。……これが因果の方程式です」という意味です。

今、薬害エイズの問題の真相が徐々に明白になり、権威の頂点に居た人が裁かれようとしています。あ

あの安部英医師は血友病治療の研究に熱心に取り組み、患者家族の信頼を集めました。何故、彼は法廷に引き出されることになったのでしょうか。

血友病治療の最高権威と崇められ、厚生省エイズ研究班の班長として国の信頼を得、医科大学の副学長に就任し、患者さんと共に病氣と戦う一人の医師としての心を忘れてしまわれたのかもしれない。まさに「高い山に登る者」でした。それ故に一人一人の患者さんを軽く見てしまい、結果として人生の高処から引き降ろされようとしています。

法華経の常不輕菩薩品には、どんな悪人にも仏様になる性質があると信じて、自分を馬鹿にしたり危害を加えようとする人をも拜む「不輕菩薩」の話が説かれています。拜まれることで狂暴な人も反省し成仏しました。

私達自身の中にも傲慢・軽蔑の心が有ります。安部医師の行為を批判するだけでは同類になりません、安部医師の仏性の存在を信じて。

南無妙法蓮華経　　合掌

平成八年秋号

八風に冒されず　　安定した心

賢人は八風と申して、八つの風に冒されぬを賢人と申すなり。利・衰・毀・誉・称・譏・苦・樂なり。おおむねは利あるに悦ばず、衰うるに嘆かず等の事なり。この八風に冒されぬ人をば必ず天は守らせ給うなり。

(日蓮聖人御遺文・四条金吾殿御返事)

賢い人というのは、八つの風に冒されない人ということです。八風とは、利(リ)・うるお(い)・衰(スイ)・おとろえ(おとろえ)・毀(キ)・やぶれ(やぶれ)・誉(ヨ)・ほまれ(ほまれ)・称(シヨウ)・たたえ(たたえ)・譏(キ)・そしり(そしり)・苦(ク)・くるしみ(くるしみ)・樂(ラク)・たのしみ(たのしみ)の八つです。およその意味は、得をしたといつて悦んだり、衰えたからといつて嘆いたり等しいことです。この八風に冒されない人を諸天善神はお守りになるのです。

人の感情を突き動かし、愛憎の情をおこさせ、冷静さを失わせる八種類の原因を風にたとえて説かれています。

世俗的な利益や名誉、称賛、楽しみに喜び逆に衰退し、毀れ、そしられ、苦しみに憂いて、一喜一憂する。凡人の我々は冷静ではないられない。まるで風に舞う木の葉のように翻弄されるか、惑わ

されまいと努力するかで、心の安定度が違いますよね。

先日亡くなったダイアナ元妃の生涯は波乱に満ちたもので、毀誉褒貶の強い風に翻弄され続けた一人かもしれません。しかし、あれだけ多くのイギリス国民や世界の人々に惜しまれ悲しまれたのですから、良い生涯だったのかもしれませんが。

他方インドで貧しい人々や病んだ人々の救済に人生の大半を捧げ、ノーベル平和賞を受けられ、後進に後事を託した後に八十七歳の生涯を閉じられたマザーテレサは八風に動かされずに、自分の信じる道をまっとうされたのでしょうか。

お彼岸は日頃忙しく働く人の反省と修行の期間。ご自分の人生の目的は何か、生まれてきた意味は何かと、問いかけてみてはどうでしょうか。それだけで何事にも動じない強い心が持てるわけでもないでしょうが、少しは些細なことに一喜一憂しなくなるかもしれません。まずは心を静める為に、お仏壇の前で。

南無妙法蓮華經　合掌

平成九年秋号